序

セップ・リンハルト

1．研究課題への個人的な接近

この本は、京都の西の山の奥にある国際日本文化研究センター（日文研）という文部省の研究機関で平成７年４月から平成８年３月までに行われた共同研究の報告書である。私は平成４年12月の日文研の公募に対して、「日本人の労働観・遊び観及び行為の歴史的発達」というテーマを研究するために日文研で一年間共同研究組織を作ることを申請した。その後、私がこの申請の受け入れにあまり期待をかけない内に、それへの返事として平成５年６月頃、当時の所長の梅原猛先生から私の申請が採択されたという、私にとって大喜びの通知が私の母校ウィーン大学へ届いたのだった。

私は日本人の労働観と余暇観、あるいは言い換えれば仕事観と遊び観、に昔から興味を持っていた。昭和38年にウィーン大学に入学し、日本学の勉強をし始め、約30年も前、昭和42年の４月に、２年間の留学のために日本に来た私にとって日本人の働き方よりも日本人の遊び方が驚きの対象となった。なぜなら、日本人の働き方は昭和40代にもすでに世界的に知られていたので、私も日本人が「勤勉に働く」というイメージで日本に来た。しかし愚直な私は、猛烈に働く日本人が同時に壮烈にと言っていいほど遊ぶこともできるとは想像もしなかったのである。

日本人が西洋人に対していつも聞く質問の中に、「西洋人は皆恋愛結婚するにもかかわらず、どうしてヨーロッパにも離婚があるのか」という決まった質問がある。この質問の中の簡単な論理のような論理が、私が初めて日本に来たときに私の頭の中にも働いていた。日本人はよく働いているので、彼らにはよく遊ぶ暇がなかろう、と。なにぶん30年も前のことなので、今と違って未だ日本の観光客も殆どウィーンでは見られなかった。海外で「遊ぶ日本人」を見るチャンスはそれほどなかった時代であった。

日本に来た目的は博士論文のための現地調査や資料収集であったが、この論文は明治時代の北海道移民を対象にしたので、私が最初に日本で住んだ町は北海道の都、札幌であった。もちろん昭和47年冬季オリンピック以前の札幌だったので、札幌はまだ今の札幌と比較できる大都市ではなかった。しかし、町の中心地以外にはまだ道路が舗装されてない、この札幌には巨大な盛り場「すすきの」があった。札幌より遙かに古い、人口の多い、文化施設が豊富な、ヨーロッパの昔の帝都の一つウィーンでは、札幌の「すすきの」のような盛り場は全然なかったので、日本の社会の勉強をした私にとってこの「すすきの」はとっても魅力のある場所になった。勤勉に働く日本人がそれほど大きな盛り場を作るとすれば、かれらはマックス・ウェーバーのいうプロテスタント精神とはかなり違った気質を持たなければならないであろう、と私は考え

たのである。

オーストリア人としてカトリック文化圏に属している私は労働が好きではあるが、プロテスタンティズムの、または儒教の禁欲主義があまり好きではない。人間の人間性は労働だけではなく、やはり遊びにおいても得られると私はいつも強く感じていた。働くのがいいことであれば、どうして遊ぶのが悪いことに決まっているのであろうか。働くと遊ぶとはどうして対立関係に立たなければならないのか。だから労働と遊びを両立しようとした日本人が私にとって大変興味深かった。

私の最初の学術的な論文は明治時代の北海道移民の開拓精神を扱った(1)。彼らは大変な努力で北海道の農業の基盤だけでなく、今の北海道の基盤を造った。禁欲的な、模範的な、プロテスタント的な日本人がその移民の中には多かったであろうが、私が調査した富山県礪波平野から北海道に渡った移民が移住と同時に鍬と鋤だけではなく、越中の獅子舞、つまり文化と遊びも北海道へ持っていって、立派に成功した。そしてこの開拓地の中心都市札幌には、儒者の目からみて巨大な悪所、庶民の目からみて素晴らしい盛り場「すすきの」が成立した。

北海道の開拓移民で特に屯田兵が日本人の間で開拓苦労者としてよく知られている。しかし、私が北海道の歴史を調べたところ、この士族の背景をもっている屯田兵が、士族の明治政府、士族出身の開拓使高等官僚に一般の移民と比較できない恵まれた条件に置かれていて、それらの好条件に相応しい程開拓に寄与しなかったと言えるのである。これを分った後、ソ連の有名な労働苦労者スタハノフのそれと同じように、日本にも労働に関する神話が非常に多いと段々分ってきた。井上章一がこの本で扱っている二宮金次郎がその一番よく知られている現代までに大きな意味をもっている事例である。

私が北海道の調査をまとめてから、今度は1972－3年頃日本の大企業で働いている男のサラリーマンの調査のために京浜地帯へ出かけた。当時は「猛烈社員」や「マイホーム主義」が日本社会でまだ流行語であったので、私はまた愚直にもこの二つの言葉が対立関係にあると思っていた。調査の結果として大企業の中でのキャリアの意味がよく分った。明治時代の立身出世思想の伝統がやはり有名校を卒業した、会社のトップの地位を狙っているエリートコースの男子サラリーマンにまだ生きていると強く感じた。調査の前に考えていたホワイト・カラーサラリーマンが猛烈社員で、ブルー・カラーサラリーマンがマイホーム主義者であるという図式が割合に当ってはいたが、多少はホワイト・カラーの中にもマイホーム主義者がいた。こういうケースをもっと厳密に調べてみると、ホワイト・カラーのマイホーム主義者が大抵キャリアの落ちこぼれであった。逆に、ブルー・カラーの猛烈社員も少しはいたが、彼らは工場でブルー・カラーの許す限りのキャリアを目指していた。労働と余暇と家族との三つの領域の生活行為と価値観を調べたこの調査でも、余暇は猛烈社員のためにも大きなウェートを占めていると分った(2)。

この調査結果を本にしてから、これで教授資格号を取り、また余暇調査のために日本へ戻った。今度は、私が前から不思議に思っていた日本の高齢者の高い比率の労働参加を把握するために、老人の手で作られ、非常に沢山存在する諸組織－老人クラブ、老人大学、高齢者事業団等－を研究対象にし、北海道の旭川市から兵庫県の加古川市のいなみの学園までこういう組織

の中のお年寄の余暇活動を調べた。すると、私が初めから想像もしなかった結果が現れた：調査当時、つまり1977－78年、の65歳以上のお年寄りがーそれは皆明治生まれの日本人であったがー、一方で定年生活者としても一生懸命働いて、または学習していたが、またその一方では若いときから立派な趣味を持っていて、彼らの趣味を基礎に素晴らしい文化活動に没頭していた。驚いたことに日本の老人クラブなどには、例えばカルタのトランプ遊びなどのような純粋な、軽い娯楽的な活動がこちらの老人クラブと比べて大変少なかったのであった。私の目から見て立派な文化活動として分類できる、特に女の人の間で非常に人気の高い日本舞踊ともっと庶民的な踊りが多くのクラブで喧嘩の種になっていた。なぜなら、女の人の踊りが老人クラブに相応しい文化活動ではないという大変禁欲的な意見がメンバーの間に時々あったからである[3]。

教授になってからウィーン大学での仕事の量が物凄く増え、日本での社会調査がやり難くなっていた。そのために私はウィーンででもできる本とかその他の資料からこの私の諸調査で現れた労働観と遊び観を歴史的に調べるようになっていた。この方面の資料を沢山読んだ後、私が1988年には８ヶ月という割合に長い時間を京都大学の人文科学研究所で過ごすことができた。しかし、そのときにいつの間にか「拳遊び」という日本人の遊びの事例研究に没頭してしまい（いまでもその「拳」の研究も続けてやるが）、日本人の勤労観・余暇観という大きい研究テーマに手をつけても、まだ充分な研究成果があがらないで今日に至った。この研究課題は個人研究として大きすぎると認識していたが、幸いに平成七年度に国際日本文化研究センターで共同研究として実現できた。

2．研究課題の現代性、必要性、社会的意味について

日本人の自己イメージで日本人の長所として、ニューファミリーとか新人類などのマスコミのいろいろな反対の説にもかかわらず、一番はっきり現れていて、ますます世論調査で多くの人々によって肯定されているのは、「日本人は勤勉である」という事実である。統計数理研究所の1953年から５年毎に行われている「国民性調査」に、1958年から日本人の長所と短所を聞く項目が含まれていて、その結果はつぎの通りである[4]：

＃９．２　日本人の性格（長所）

つぎのうち、日本人の性質をあらわしていると思うコトバがあったら、いくつでもあげてください。（リスト：１　合理的、２　勤勉、３　自由を尊ぶ、４　淡白、５　ねばり強い、６　親切、７　独創性にとむ、８　礼儀正しい、９　明朗、10　理想を求める、11　その他（記入）、12　DK（回答は％で）

	勤勉	ねばり強い	親切	礼儀正しい
1958	55	48	50	47
1963	60	55	42	43
1968	61	58	45	47
1973	66	52	31	37
1983	69	61	42	47
1988	72	50	38	50

ここでは日本人の意見が一番一致している四つの長所だけを上げたが、この四つは各調査で一番多くの人々で述べられ、その中でまたいつも「勤勉」がトップの位置を占め、そうして特に73年調査から他の長所との差は広がった。88年調査のときには日本人の７割以上も日本人は勤勉であると思っていたといっても、もちろん性別、年齢別、教育別、地方別に色々な差異が存在している。女よりも男、老若年よりも中年、教育年数は短い人よりも高等教育を受けた人々、北海道、四国の人々よりも関東、近畿、中部、九州の人々、そうして人口５万人未満の市町村よりも人口20万人以上の大都市の居住者が日本人の勤勉性を強く意識している(5)。

日本人の自己イメージに根強く固着されているこの勤勉性はその他にも沢山の調査結果から知られる。もう一つの事例だけをあげれば、国際日本文化研究センターの浜口恵俊先生の1989年東京都の６大企業の従業員875人を対象にして行われた調査の結果がある。日本人の性格を表す全20項目の内で、日本人の回答者が一番一致したのは「日本人は教育に熱心である」と「日本人は勤勉である」という２項目であった。回答者の40.1％は「日本人は非常に勤勉な」、39.3％は「かなり勤勉な」、12.0％は「やや勤勉な」、これを合計すれば91.4％も「日本人は勤勉な」性格をもっている民族であるといった。逆に「日本人は怠惰な」性格をもっているという人々は3.7％しかなかったのである(6)。

勿論、私はこういう日本の国民の共通の認識は正しくないと言いたくないが、この認識からの解釈は多くの場合は疑わしいと思われる。つまり、多くの日本人にとってこの日本人の勤勉性が日本人の最大の美徳なのである。毎日忙しくしている日本のサラリーマンやOL、共働きの主婦など、恐らく自分は勤勉であるからこの忙しい毎日の生活を我慢できると考えるようである。「生活が忙しい」とか「生活が忙しくなった」という印象は日本だけの現象ではないが、人口密度の高い、人口集中が極端なこの日本にはこの忙しさがはっきり見られる。マスメディア、パソコン、自家用乗用車（マイカー）、共働き、などなどが忙しさの原因としてあげられていいのではないか。

それに加えて、1960年頃から相次いでレジャー・ブームが起こり、現在まで続いている。よく言われているように、労働と余暇、働くことと遊ぶことが相関関係にあるのであれば、余暇への関心の増加はまた労働意欲の減少をも意味しているであろう。一般の人々の意見としてよく西洋人と日本人の比較で、西洋人は「遊ぶために働く」という態度なのに対して日本人は「働くために遊ぶ」という態度を示す、というようなことが聞かれる。つまり西洋人にとって労働は遊びに必要な収入を得るための一つの手段に過ぎないのに対して、日本人にとっては遊ぶことが労働のためのレクリエーション的な機能しかもってない、と聞こえるが、諸レージャ・ブームによって日本人の遊び観も少し「西洋的」になったと推定できるであろう。

しかし数年前流行ったあるウィスキー・メーカのコマーシャルのキャッチ・フレーズ「大統領のように働く、王様のように遊ぶ」に表現されているように、よく遊ぶことは仕事に障害となってはならないから、過去の各レジャー・ブームによって日本人の仕事と遊びの理想的な関係は前の「働くために遊ぶ」型（代表的レジャー行動：ごろ寝）から「精いっぱい働く、精いっぱい遊ぶ」型へ展開してきた。

この数年間、1987年の労働基準法の労働時間規定の40年ぶりの改正をはじめとして、完全週

休二日制の普及や時短が進んでいたけれども、規定内労働時間は短期間で大部減って、総労働時間はアメリカとイギリスのそれには近づいてきたが、労働者が報告する総労働時間はそれほど変わらなかった。これはやはり日本の勤労者の多くが企業のために公的な労働統計に現れていない「サービス残業」とか「ふろしき残業」といわれている残業をあいかわらずよくやっていることを意味している。

いうまでもなく1986年頃から「過労死」という新しい概念があらわれ　一、その現象はもちろんいつの時代でも、どこの国にでもあったけれども　一、数多くの弁護士はそれ以来現在まで各裁判所で夫に死なれた妻達などのために争っている。1991年７月18日の『朝日新聞』によると特にサービス残業と過労死との関係は深い。

「精いっぱい働く、精いっぱい遊ぶ」型という労働時間と余暇時間の過ごし方では、仕事にも、余暇にもストレスが起こりやすく、過労死の一部は単なる過労死ではなく、「過労・過遊死」であるとも考えられる。

会社のために、残業のために給料をもらわなくても、極端の場合には死ぬまで働くほど、その会社に対する強い忠誠心を持たなければならないという説もある。つまり、日本人は勤勉だからよく働くのではなく、会社にたいして強い忠誠心をもっているから会社のための仕事の場合は非常に勤勉である。これは本当かどうかは別として、やはり日本人の勤勉性を理解するためには、会社とその従業員との特別な関係も検討しなければならないと思う。

西洋人は日本人について日本人の自己イメージによく似ているようなイメージをもっている。例えば1981年からドイツの有名なアッレンスバッハ世論調査所がドイツの全人口から16歳以上の2010人を選んで対象にして行った日本イメージ調査がある(7)。

このリストには各国の国民についていわれていることが書いてあるけれども、あなたは日本人についていうならば、このうち何が日本人にあてはまるか？

長所	1970	1981
勤勉	96	86
礼儀正しい	62	66
商売上手	－	64
責任感がある	62	59
規律正しい	45	59
謙遜	－	58
活発	57	56
知性豊か	20	44
（あとは40%以下なので省略した）		
短所（全部10%以下なので省略した）		

日本人好き・余り好きでないによって内訳

長所	総	日本人好き	余り好きでない
勤勉	86	95	76
礼儀正しい	66	73	42

これらの質問から分るように、1970年調査から1981年調査までに勤勉性を日本人の長所としてあげたドイツ人が96%から86%へと１割ぐらい減ったが、日本人の勤勉性は1981年にもあいかわらずトップの地位を占めていた。面白いことに特に日本人の好きなドイツ人が日本人の勤勉性を長所としてあげているのである。過去にはドイツ人も自分達が勤勉な民族であると思っていたようであるが、ドイツ人の自己イメージと他国のイメージについての質問から分るように、いまのドイツ人が日本人はドイツ人より勤勉に働くと思っているらしい。しかし日本人の勤勉性を高く評価しているドイツ人の殆どだれも日本は暮らしやすい国であると考えていない。

ドイツ人の自己イメージと他国のイメージとの比較

イメージ	ドイツ	日本	フランス	米国
勤勉な人間	44	76	9	10
超産業国家	60	62	21	75
素晴らしい伝統のある国	36	58	60	21
国家に誇りのある国	15	56	67	35
（省略）				
暮らしやすい国	57	9	50	23

次の質問で日本経済の優等生たる原因が調べられたが、ドイツ人の半分以上が日本人の労働時間の長さや日本人の勤勉性を、日本経済が優等生であることの重要な原因として評価していた。

日本経済の優等生たる原因

日本の商品が安いから	82
日本人の労働時間が長い、余暇時間が短いから	60
日本人がもっと勤勉に働くから	59
日本人の給与等の待遇が良くないから	56

しかし、長い労働時間や勤勉に働くことが日本の場合は経済力の重要な原因として認められていても、ドイツ人の三割しか、ドイツ人も日本経済力への対策としてもっと長く、もっと勤勉に働かなければならないという結論を支持しないのである。特に緑の党や社民党支持者がこういう政策をあまり好まないようであるが、保守党支持者の中には半分ぐらいはドイツの昔の美徳である勤勉性に日本経済に対する適切な対策を見ているようである。

日本の経済力への対策（支持政党による内訳）

	総	CDU 保守党	SPD 社民党	FDP 自由党	緑の党
（1．－5．省略）					
6．ドイツ人はもっと長く働かなければならない	36	50	28	41	16
7．ドイツ人はもっと勤勉に働かなければならない	33	43	27	35	19
（8．－12．省略）					

この西洋社会に支配的な「勤勉な日本人」のイメージの結果として西洋社会にとって、または西洋と日本の国際関係にとって少なくとも次ぎの三つの傾向がこの数年間にはっきり現れたと言える。

1．日本人はある種のモデル的民族になっている[8]。例えばドイツでは特に自営業経営者、マネージャー、CDU支持者は「われわれの労働者も日本人のように働けば！」と思っているようである。それだけではなく、日本の政治家の一部も同じようなことを信じているようである。例えば1992年2月に当時の日本の首相の宮沢喜一氏が「アメリカ人は日本人のように働けば」という意味で「アメリカには昔のいい労働倫理が消えてしまった」と言って、アメリカで大変な反響を起こした。逆に、世界の労働組合にとって、「働き過ぎ」の日本人の労働者は一種の悪例になっている。個人的な経験から一例を挙げるならば、私の大学生の息子に「もっとしっかり勉強せよ」と言えば、彼は決まって「私は日本人ではない」といつも突っぱねるのである。

2．日本は長労働時間のためにソーシャル・ダンピングの批判を受けている。長労働時間との関係で日本人には余暇時間の余裕がないから、日本人の余暇活動も乏しく、日本側は外国のレジャー用品も購入しない。だから日本人のその特殊な労働・余暇観とそれによって決められている行動のために、貿易摩擦が、日本人の労働・余暇にたいする態度がかわらないうちは、続くはずである。これはいわゆる日本叩き、Japan basher、revisionistsの立場であるが、アメリカの社会学者Robert Coleが言ったようにそれは公の立場ではない[9]。1991年の当時フランスの首相として務めていたクレッソン婦人の発言もこの類のもので、宮沢発言と同じように首相らしくない発言であった。“日本人は働き蟻である”という彼女の批判にたいする日本人の反応も面白い。たとえば、日本経済新聞（1992年2月3日）に、もしそれが日本では蟻族と同じように20%しか働かないで、また80%は遊んでいるという意味であれば、それは正しいという社説が書いてあった。それはもちろん我々日本人がもっと働かなければならないという意味の社説に違いない。

3。過労死という概念の非常に短期間に行われた国際的な普及によって－同じような現象はどこにもあるにもかかわらず－日本の文明国としての国際的なイメージが大部悪くなったといえる。日本はワーカー・ホリック（労働中毒患者）の、住み難い社会であるというイメージはまた強くなった。こういうグローバル・コンテキストで宮沢首相が告知した「生活大国」政策は大変筋の通った政策であった。

3．この本の内容について

以上でも明らかになったであろうが、西洋諸外国と日本との間の問題の大部分が、正しくないイメージの問題である。日本経済新聞が言った程ではないかも知れないが、極端に働く日本人は日本人の一部に過ぎない。クレッソン婦人を初め、日本叩きが信じられない程日本人はよく遊べるのである。いや、遊ぶのである。しかし、日本人の働き者としての自己イメージも、日本人に日本人を正しく理解させない原因の一つとなっている。

この自己イメージの由来はどこにあるのであろうか。私の解釈では、これは、数百年にわたって日本で支配者のイデオロギーとして強力な役割を演じていた儒教思想にある。「小人閑居して不善をなす」に従って、幕藩制度の支配者も、近代や現代日本の会社経営者もなるべく庶民には遊ぶための必要な自由な時間を与えなかったのである。しかし庶民は幸いに、政治の色々な束縛にも関わらず、世界にも例の少ない立派な遊び文化を生みながら、よく遊んでいた。江戸時代の小人（＝庶民）の「不善」な行動（＝遊び）が世界文化レベルでも大いに自慢できる歌舞伎、錦絵、戯作文学、等などを生み出したのである。

自分を守るために庶民もタテマエとして儒教のイデオロギーを認識し、会社のための仕事を最大の美徳にしていたが、ホンネとして、遊びも大好きだから、働きと遊びを両立させたかったのだと思われる。もちろん少数の遊び人がいるのと同じように、タテマエのイデオロギーと百パーセント一致していた人間もいつも少数はいたし、戦争のときのように遊ぶ暇が殆どなかったときもあった。

外国人の日本イメージにも、日本人の自己イメージにも以上のタテマエの儒教のイデオロギーは今でも大きなウェートを占めていると感じながら、私はこの儒教のイデオロギーの重いカーテンを引き抜くことを通じて、日本の歴史で日本人のホンネの遊びと働きとの関係を見るのがこの研究会の目的であると思った。これが新しい日本理解をもたらす新日本イメージに少しでも貢献すれば、というのが、私がこの研究プロジェクトを申請したときに望んでいたことだった。

労働の時間と遊びの時間以外に、人間には生理的要求に必要な時間がある。その時間区分で一番沢山の時間を占めているのは眠りの時間であるが、これは驚く程に人文学者や社会科学者の目から見逃されていたのである。眠りはもちろん遊びとも労働とも密接な関係にあり、ある場合には片一方のために犠牲にされている。シテーガ氏がこういう先駆的な研究を日本の古代人から現代人までなしているが、研究の第一歩としてここで古代の日本人の眠りについて報告している。日本の現代社会とあまり関係がないようなこの研究テーマは、比較のつもりで奈良・平安の貴族社会を調査しているが、やはり一千年前と今の眠り習慣にも多少の連続性がある。

その次に山折氏が山折氏らしい非歴史学的な、現象学的な方法でヨーロッパと日本を比較しながら、ヨーロッパにはヴァケイションとホリデーの区別が存在するのに対して、日本ではこういう区別がないから、日本人は遊び下手であると主張している。続いて山折氏は日本人の遊びと遊びごころの基本パターンを、広く色々な事例を引きながら、追求している。この日本人の遊びが大いに変化していたにもかかわらず、遊びの伝統パターンはいまでも日本人の遊び行

動に影響を与えている、と山折氏は結論を下している。

山折氏と比べて原田氏は厳密な歴史的な方法で中世から近世への農民の労働と遊びの大きな変化を掴もうとしている。中世の農村の“自力”を基本とする社会は近世の集権制度で大きく変わったが、その変化が農民の労働と遊びにも著しい影響を与えた。多くの資料に基づく原田氏の論文によると、近世には中世と比べて割と均質的な社会構造がうまれ、統一的な価値観が形成されていた。農民の遊びが、上層社会のそれを模範にしながら、大変豊富になっただけではなく、支配者も、労働の支障にさえならなければ、その遊びの必要性をある程度認めるようになった。

近代化に成功するために特別な労働エートスが必要となることは、あまりにも有名なマックス・ヴェーバの理論である。住谷氏の論文では、筆者は、こういうヴェーバ・テーゼの日本の近代化過程への適用の学問的な諸研究の再評価の後、今までの殆どの学者に見逃されてきた村レベルでの宮座組織や氏神信仰と近代労働エートスとの関係を重視している。従来の研究は部分的には正しいけれども、日本人の勤勉性を基盤にした近代日本の労働エートスを理解できるためには、やはり住谷氏の立場のような総合的な立場が必要である。

明治記の北海道の開拓農民の激しい労働状態と彼らの数少ない遊びを具体的に調べたのは桑原氏の論文の功績である。二人の開拓移住民の日記を事例として使いながら、これらの開拓者には労働以外に遊びもあったと著者が確証できる。しかし、全開拓移民の中では日記を残した人々はそれ程多くないから、大部分の移民の、特に小作農場で強制された開墾をしなければならなかった開拓者の、生活の中で、労働と遊びがどのような位置をもっていたのか桑原氏のこの画期的な論文を読んだ後も、著者が認識しているように、まだ知られていない。

リンハルトが幕末・明治期の西洋人の日本報告を分析し、その中に現れる日本人の労働精神と遊び心を検討している。元禄期頃に日本に滞在していたケンペルの日本見聞記にはもうすでに日本人の勤勉な働きぶりが誉められているので、「勤勉な日本人」のイメージはかなり古いようである。しかし、日本人はケンペルにとっては一種の模範的な民族であったことは忘れてはならない。明治期の文献では勤勉な車引きなどと並んで生活を楽しんでいる気楽な日本人も多く描写されている。西洋人の日本人の印象、日本人のイメージはまだ一方的ではなかった。

現在「日本の働き蜂」、「日本の働き蟻」、「日本のワーカー・ホリック」、「働き過ぎの日本人」などと言えば、それはわれわれの頭の中に主として日本のサラリーマン、つまり男性の会社員を連想させる。近代文学を研究している今井氏は、近代化していく女性の労働観・遊び観のケース・スターディとして文学者の与謝野晶子のそれを取り上げている。彼女の読者の間でロマンチックな女性として知られている晶子は、今井氏の研究から明らかになるように、大変な働き者でもあった。こういう働き者のお母さんの「お手本」が日本の子供たちの中に日本的な勤勉さを作るためにどれほど重要であったかは言葉では表しがたいのである。テレビの「おしん」が八十年代にあまりにも大きい反響をおこしたのはこう考えると不思議ではないと思う。

竹村氏は晶子の同時代を扱っていて、阪神電鉄が大正期に造った田園都市という新しい生活空間、遊び空間を分析している。関西の阪急、小林一三、宝塚、または東京の田園調布についての文献はかなり多くなっているが、阪神の同じような事業についてはまだ少ない。竹村氏は

当時の阪神のPR雑誌を分析しながら、特に園芸を新しい余暇活動として描写している。阪神の田園都市に住んでいた人々はやはり先駆的な役割をもち、モダンな生活を楽しんでいたに違いなかろう。

もうすでに明治期に日本人のモデル的人物になっていた二宮金次郎の働きながら読書する像がかつて日本の殆どどこの小学校の前にも置いてあって、世俗的な人間像ではこれが一番沢山あったと思われる。しかし、最近の校庭像としては少年少女の遊戯像が一番多くあると井上氏は指摘している。金次郎の像がなくなったことは多くの人々が戦後のアメリカ占領軍の民主化政策の一部として行われたと考えているようであるが、井上氏の説明によると、それはむしろ一九六〇年代の社会変化と関係がある。不思議なことには、校庭では見えなくなりつつあるこれらの金次郎像がプライベートな施設や外国ではいまなお新しく置かれている。

アメリカの政治学者のレヒーニ氏は、日本の国家のレジャー政策の特徴として、日本の国家の国民のレジャー活動に対する特別な関心や、日本の国民とアメリカ、ヨーロッパの先進国の国民との比較調査の実施などを指摘している。レヒーニ氏は、国の機関ともいわれる余暇開発センターを分析しながら、センターにとってあくまでも西洋先進国が日本人のレジャーのモデルになっているのに驚いているようである。こういう国際比較の水準としての西洋先進国のレジャー行動が外圧にも関係しているとレヒーニ氏は推定する。

暉峻氏は現代の日本の暮らしの中の労働と余暇を生活経済学の立場から幅広く扱っている。先ず理論的に人の生活の中で労働と余暇の位置を決めてから、戦後の余暇と労働時間の歴史的展開を明らかにする暉峻氏の論文の終りには、日本社会がこれから必要とする理想的な労働と余暇の状況が挙げられているので、この論文が歴史的研究を超え、未来への注文をも含んでいる。

最後の鷲田氏の論文は「勤勉の精神と真空恐怖」という、西洋人の目で見て、大変日本的なテーマを扱っている。簡単に言い換えれば、人間の日常生活に怠けるために余裕があれば、その人が病気になりやすい。真空恐怖というこの精神病は、特に労働に生きがいをもっている人々の、労働の意味が急になくなると、怒りやすい。この類の精神病に入る「五月病」と比較できる病気は、日本以外の国々にあまり存在しないような気がするけれども、似たような現象の「年金生活ショック」が世界の産業国家のどこにもあるらしい。働くことは人間に一番充足感をあたえる生活のありかたが構想しなおす必要があることは著者の、またこの本の結論でもある。

玉稿を短期間に下さった研究会のメンバーの方々に心から感謝申し上げる。日文研との契約書では研究を一年間してから、つぎの一年以内に研究会の報告のつもりで本を出版しなければならない、となっている。こういう時間的な制限があったので、研究会の丁度4割のメンバーは原稿が間に合わず、大変残念に思いながらも、そのためにここには入れることができなかった。そこで、念のために、楽しい研究会へ参加して下さったことへの感謝の気持をこめて、ここに諸氏の研究発表のテーマを、ほぼ扱われている時代の歴史順にリスト・アップしておく(所属は研究会の時)。

横山　俊夫(京都大学)：色道あれども風呂道なし？
園田　英弘(国際日本文化研究センター)：近代日本における勤勉の起源
芳賀　　徹(国際日本文化研究センター)：日本人の「遊び」観を俳句に読む－蕪村から現代まで
白幡洋三郎(国際日本文化研究センター)：明治の遊び
津金沢聡広(関西学院大学)：阪急の沿線開発にみられるあそび観・余暇観
中川　　清(同志社大学)：近代日本における労働意識の変容
柏岡　富英(国際日本文化研究センター)：「働きすぎ・働かせすぎ」論の批判的検討
井上　　俊(大阪大学)：戦後日本における「遊び」言説の盛衰
飯田　経夫(国際日本文化研究センター)：近年の日本経済の問題点

研究会の幹事をして下さった井上章一氏に対しても御礼のことばが足りないと認識している。そして私の京都の山奥の一年間の生活を楽しくしてくれた梅原猛前所長と河合隼雄現所長をはじめ、「ニチブンケン」の皆様にもこの頁を借りて私の感謝の気持ちを表わしたいのである。

最後になったが、私の日本語を直して下さった東京都立大学の中居実氏にも深く御礼を申し上げる次第である。

1996年の夏休み中のウィーンにて　セップ・リンハルト

注

(1) Sepp Linhart: "The Frontier Spirit of Hokkaido: Illusion and Reality", Beitraege zur Japanologie 6 (1969), p.53-71
(2) Sepp Linhart: Arbeit, Freizeit und Familie in Japan. Eine Untersuchung der Lebens weise von Arbeitern und Angestellten in Grossbetrieben. Wiesbaden 1976
(3) Sepp Linhart: Organisationsformen alter Menschen in Japan. Selbstverwirklichung durch Hobbies, Weiterbildung, Arbeit. Wien 1983
(4) 統計数理研究所国民性調査委員会編『第5日本人の国民性。戦後昭和期総集』東京：出光書店1992、360－361頁
(5) 上同書、468－469頁
(6) 浜口恵俊編『アメリカ・ヨーロッパ・日本における「日本イメージ」――比較調査研究』京都市：国際日本文化研究センター1993年、152頁
(7) Institut fuer Demoskopie Allensbach: Japan-Image 1981. Ergebnisse einer repraesentativen Bevoelkerungsumfrage in der Bundesrepublik Deutschland (vervielfaeltigter Bericht).
(8) 「勤勉なドイツ人」が昔日本人の「お手本」の民族であったので、「勤勉に働かなくなったドイツ人」が日本人の失望の対象にもなった。例えば岩谷清水は1983年に出版されたドイツ旅行記にはこう述べた：「ドイツ人が勤勉な国民である」と思っている日本人が昔から多いようだが、日本流の「勤勉」という観念で考えたら、それはとんでもない見当ちがいである。ドイツ人が、他のヨーロッパ諸国の人間と本質的にちがっているはずもなく、要するに個人主義にもとづいた生き方を追求するのだから、日本人のような「会社のため」とか、「仕事あっての自分」などという観念は本質的にはまったくない。より快適な、より充実した自分の生活が、あくまで中心となるのであって、会社や仕事を生活の中心に置く日本人一般の考えと比べたら、天動説と地動説ほどのちがいがあるといえよう。したがって、「ドイツ人は勤勉などではない」と考えたほうが正しいということになる。(『学びすぎたか日本人』講談社1983年、217頁)
(9) Robert E. Cole: "Work and leisure in Japan", California Management Review 34／3 (1992), 53頁